

の活動を検証した。「会津学」は地域誌の編集・発行を活動の中心に据えており、会員たちがどのような意識をもって会津という地域を見つめているかは、地域誌『会津学』のレポートの特徴によくあらわれている。そこで本研究では、『会津学』のレポートの特徴を検証した上で、実際に「会津学」の活動を観察し、会津の地域像が再構築される過程を追うことにした。

『会津学』は、執筆者たちの生活の内部から見た会津の姿や、すぐ側で生きる人の言葉を記録することを重んじる地域誌だ。そうした姿勢の背景には、会津の生活を次の世代へ継承させたいという思いと、会津で生活する自分自身への作り手たちの思いがある。そのような姿勢と思いにより、それまで他者によって語られがちだった会津の地域像を、会津と深くかかわりながら生活している執筆者達に取り戻していくということが起きている。

また地域誌『会津学』は、会津の姿を忠実に記録することにより、会津の多様性も明らかにした。その結果、これまで一体だと思われてきた「東北」という枠組みも揺らいできた。このことは、それまで日本の中で「辺境」と見なされてきた「東北」という単位について、もう一度再考する必要性があることを示している。

地図と気象データに見る満洲開拓：
ある信州女性の開拓地を事例として

後藤 安里

長野県では満洲開拓に行った人が最も多かった。したがって県内では満洲開拓に関する記事や著作、講演が現在でも多い。

しかしその多くは個々人の逃避体験を基にしたものである。それゆえに、実際に満洲の気候環境がどのようなものであったか、という視点が抜け落ちたまま語られている。つま

り聞き手あるいは読み手には、満洲がどのような気候環境にあり、どのような気候環境の下で開拓民が開拓していたかについて、限られた情報しかなく、当時の満洲の地理的視点が欠けたまま伝わっている。

そこで本論文では、満洲の地図と気象データを掘り起こし、当時の気候環境について事実を見ていく。その際、比較のために当時の満洲の気候環境が長野県と比較してどのような違いがあったかに焦点を当てる。

事例として、長野県の下高井郡出身の女性、高山すみ子さんが開拓された、満洲国の東安省宝清県万金山開拓団高社郷（以下、高社郷）を取り上げる。そのために本論文では、一つ目に満洲国や満洲開拓について概要を見ていく。二番目に長野県が全国的に被害の大きかったことについて述べる。三番目に下高井郡について、高社郷の経緯を追っていく。

四番目に高社郷の五万分一地図を用いて当時の地形や位置を見ていく。次に高社郷に最も近い気象観測地である宝清観測所の気象観測データを、高山さんが長野で暮らしていた下高井郡の瑞穂村に最も近い観測所である飯山観測所と比較する。そして下高井郡の開拓民はどのような環境の中で開拓をしていたのかを気象データから明らかにする。さらに高山すみ子さんに焦点を当てる。

高社郷の事例を見た上で、満洲開拓は開拓民にとって悲惨な結果となったが、それを後世の人が知る上で、現在漠然としている満洲の地理的情報を改める必要があると提案するものである。

日本の先祖祭祀と仏壇の変遷

齋藤 麻衣

筆者は幼い頃から祖父母の家で仏壇と親しんできた。祖父母はいつも「ご先祖様」に敬意を持って仏壇と相対していた。しかし他所の家ではどうなのだろうか。本論文は、仏壇